

民族音楽学における映像の活用可能性 ～ 韓国の農楽の映像記録の事例を通じて～

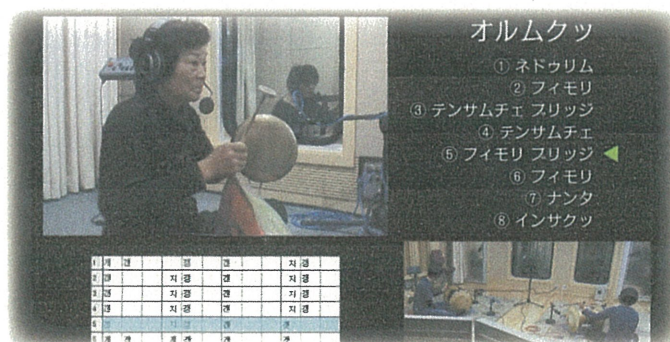
神野 知恵 (かみの・ちえ)

本発表では、申請者が行ってきた韓国の農楽研究での映像記録の事例を通じて、これからの民族音楽学における映像の活用可能性について検討する。

人類学的アプローチをとる学問のなかでも、特に民族音楽学は映像や録音記録と切っても切れない関係にある。民族音楽学は、音楽行為をとりまく社会的背景にも関心を向けてきたが、音そのものにまつわる分析的研究がその基盤にあると言える。音は基本的には見えないものであり、瞬時に消えてしまうものであるため、これを研究するためには録音や映像を残すことが必要不可欠であった。しかし一方で、学術的成果物としてそれらはあくまでも添付資料に過ぎないという考え方が根強い。現在でも一般的な民族音楽学の論文は、文章による記述と、五線譜への採譜と、その分析によって成り立っている場合が多い。楽譜は見えない音を可視化するツールであり、音源を聞かずともそれを見ればある程度頭の中で再現が可能になるという利点がある。また、採譜をすることは音を観察してスケッチするような作業であり、それ自体が分析的行為であるので、これを通して研究者が多くの発見を得ることにもつながる。しかしそうした分析の道具として、楽譜のような静的視覚ツールにこだわり続ける必要があるのかどうかは疑問である。映像の撮影・編集・共有などが簡単に行えるようになった現在、民族音楽学の成果物として、映像という動的視覚ツールが認められても良いのではないだろうか。

申請者は博士研究において、韓国の伝統打楽器芸能「農楽」をテーマとし、1人の演奏者についてそのライフヒストリーと、演奏の特徴、そしてその継承の問題について研究した。そのなかでも特に、演奏の特徴を文章と楽譜だけで書き表すのには限界があり、非常に悩まされた。演奏者が繰り出す多様なリズムパターンを読者により良く理解してもらうため、演奏シーンの映像を編集してマークを入れたり、記号を用いた楽譜を重ねたり、MIDIソフトでリズム譜を作って再生させてみるなどの映像ツールを模索した。やはり採譜作業と同じで、こうした編集作業を繰り返すうちに、アンサンブルの関係性や、音色の種類、同じパターンの反復など、ただ耳で聴いていただけではわからなかった多くの気づきを得られた。なかには、学術的でないと批判される方法もあったため、その全てを博士論文に生かすことはできなかったが、今後は技術者と協力するなどしてこうした映像ツールの活用法を模索していき、民族音楽を分析するためのプロセスおよび成果物として認められるようになれば、と願っている。

世界の民族音楽の多くは楽譜などの視覚的記録に頼らない口頭伝承であり、パフォーマンススペースで成り立っている。いずれこれらの伝承が危機に瀕したときに、映像記録は非常に役立つであろう。しかし、生のデータとしての映像だけでなく、それをもとに分析を加えた研究成果物としての映像があればなお有効に活用されるのではないだろうか。



神野知恵 博士論文
「韓国農楽における個人
演奏者論—羅錦秋名人の
芸術世界とその継承—」
付録映像一例、2015